東海道四谷怪談　二五

伊右衛門住家の段

〔解題〕文政八年七月江戸中村座興行の鶴屋南北の傑作「東海道四谷怪談」を淨瑠璃に仕立てたものである。お岩の役で評判を取つた三世菊五郎は文政九年春大阪の角座で「いろは假名四谷怪談」の外題で上演して、お岩の幽靈で大當りをとり、同じ外題で繪入の根本さへも後に刊行された程であつたので、これに刺激されて操りでも、その作を轉用するやうになつたものと思ふ。而して操りの初演は天保二年七月廿五日から御靈境内（太夫吉田小竹）の芝居で一番目に「信州川中島合戰」（大序より三段目迄）、その跡へ「東海道四谷怪談」として出したのである。番附によれば、大和田峠の段、伊右衛門住家の段、師直下館の段、玄辰屋敷の段、向島の段、深川の段となつて居り、伊右衛門住家は竹本氏太夫が語つてゐる。この操り芝居は人氣があつたと見えて、九月九日から一番目の「川中島合戰」を「嬢景清八島日記」に變へて、四谷怪談はそのまゝ据置で興行し、翌年正月太夫本の小田小竹が兵庫の芝居でも興行してゐる。その後大阪の操り芝居で度々上演されて居るが、場割は同一ではない。例へば文久元年五月稲荷の文樂で興行の時は、深川八幡宮の段、伊右衛門住家の段、板返しの段、賴母住家の段、一つ家の段とかうなつて居る。

こゝに收めた伊右衛門住家の段が最も名高いが、原作の宅悅の代りに權平を出して居る外に、淨るりに仕立て直したので多少變つて居るが、詳しい事は本全集の「歌舞伎脚本集」に收めた原作と御比較を願ひ度い。

へ指して出でて行く。地既にその日も入相の。フシ鐘かう〳〵と。告げ渡り。籬にすだく虫の音も。ホフシいとゞ淋しき留守の宿。地お岩はすめぬ案じ顔。いつか晴れなん胸の闇。行燈取出し火打箱。移す附木の硫黄さへ。タ、キ花なき夫の心根を。とやかう思ふ女氣の。ナホスフシカ、リ一人くよ〳〵喞言。詞ホンニ浮世といひながら。水の流れと人の行末。もと此身は細川家の奥勤め。縁でかな伊右衛門殿に思はれて。お暇願うて嫁入の。間もなう產んだアノ伊之助。主の世繼と樂しんで。カ、リ育つる甲斐も情ない。地生れ落ちると疳の虫。我が身は產の惱みより血の道といふ立ち病ひ。其上にはかの浪々に。尾羽打枯らす今の身の上。よく〳〵武運に盡果てし。親子夫婦が身の上と。浮世を恨み身を喞ちフシそゞろ涙にくれけるが。地思ひ嵩じて血の道の。のぼせに思はずよろ〳〵〳〵。詞アヽ又持病のこの逆上。どうぞ仕樣は。オヽソレ〳〵。最前の粉藥と。地白湯に搔立て二口三口。飲むは毒とも神ならぬ。フシ身の放る果てぞ哀れなり。地納戸の暖簾そつと上げ。物をも言はず權平が。フシお岩が腰に抱付けば。エヽ誰ぢやぞいの。イヤ誰でもない。鼻ぢや〳〵。オヽエヽあたいやらしいと振放し。立退く袖を引止めて。詞アヽコレ待つておくれいな。最前は伊右衛門が咳拂ひに嚇されて。去ぬる振りして裏へ廻り。ほんまの留守を考へて。忍び込んだる心底男。ちつとは可愛と思うておくれ。ハテマア下に落付いて。おれがいふ事聞き給へ。コレそ樣こそ一筋に。伊右衛門に貞女を立つれど。伊右衛門の魂は。疾うに餘所へ。ヤ。ホイノホイ〳〵。と飛んであるぞえ。ホヽヽヽ。オヽまた權平樣の性わるな。夫に限つて其樣な外心はござんせぬ。必ず案じて下さんすなと。地塵灰つかぬお岩が顏。穴の明く程打眺め。詞テモ扨もさりとてはマア。疑ひ深い人ぢやなう。イヤモこの事は言ふまいとは思うたれど。あんまりそ樣がいとしさに言うて聞かす。サマ閉かしやれや。あり樣は伊右衛門が八幡へ參るとは。跡かたもない皆赤嘘。誠はそ樣も御存じの奥村喜內が一人娘に。お梅というて。モそれは〳〵美しい。顏形なら風俗なら。春の柳の腰付きに。喰付いたアノ伊右衛門。その證據といふは。即ち爰におはしますぢやて。此狀と守り袋。此中伊右衛門が袂から落したを。そつと拾うて斯くの仕合せ。オツトどつ

こい。久しいものぢやが。サマそれから御覽じ。その文句のいやらしさ。サラバ聽聞遊ばせや。エ、何ぢや。

注ミクセタ

は嬉しき御見に向ひ山々御嬉しく今しも忘れかねたり。

そのふし御申しの事。必ず〳〵御違へなう。一日なりとも早う夫婦になり。朝夕の御宮仕へなし〻〻様に。神かけて祈り〻〻。エ、何々。暫しにてもお傍を離れ候事が悲しく候まゝ。此守りを御肌に添へさせ。今宵も早や〳〵御越し〻〻の程。待ちこがれ〻〻。ナントマア憎い奴ぢやないかいたう。讀ミクセ猶またお岩様御事は。御氣の毒にお調へたといふ事迄。此鼻がへゝ聞いてはしまし候へども。前世の因果と御諦置いた。オゝこは〳〵怖やの。コレうめ下されまし。必ず〳〵御變らせなう。か〳〵として。生れも付かぬ片輪者に詳しきは御見もうじと。をしき筆とめしられうより。こつちから伊右衛門に。〻〻あら〳〵もし。主様まゐる。こがる〻梅より。何とお岩様。サ是でもこの際やるが上分別。ハテモ是程たしかなた何ともないか。イゝヤイノコレ。證據のあるに。何の思案もへちまも入現在男を寢取られても。口惜しうはないらぬ。コレ思ひ切つて應といや。地いかいの。エ、テモマ辛抱づよい女子かにお名が堅いとて。さうつん〳〵と召さる程。いとゞ思ひが增す穂の薄。ぢやナ。オゝ、、、さうぢや〳〵思ひ廢いて給はれコレマ〳〵お岩様。詞イヤモさうぴんとした顔付きが。どうも事があるてや。その小梅と母親との相談で。ソレ美しい其顔を片方はぶうと脹らし。目を大きうにして。片つらの方は小さうして。髮の毛は皆抜けて。モ見つとむない顔にして。伊右衛門が それは〳〵どうとも斯うとも言へぬ。愛想を盡かす様にせうと。ア、何とやらいふ毒藥を。水庵とやらを頼んで。

たまらぬ〳〵と。地厭がる者を無理無體。抱付き吸附き フシしなだるゝ。地手先を取つて突放し。腹立ち涙聲震はし。詞ヤア女と思ひ侮つて。主ある者に無禮千萬。たとへ夫に飽かれても。さもしい心持つ様な女子と思ふか慮外者。いらぬ肝精を焼かうより。足元の明い内早う去にや。遲いと斯うと地有合はす。小助が脇差抜放せは。さしもの權平氣味惡ながら。弱身を見せぬへらず口。詞エ、これ程心底盡くすのに。聞分けのない片意地者。今に吠え面見る様な。ヨイハ此上はモウ破れかぶれ。代官所へ御願ひ申し。貸して置いた金の元利。取りたくつてこますのぢや。待つて居らうと地言捨てに。詞は強う足は空。有合ふ草履片足には。木履片片ひつかけて。フシ足ばやにこそ逃げ歸る。地フシ跡にお岩はせきのぼす。胸の

炎の下萠を。焚付けられて女氣の。もしやさうかと取つ置いつ。フシ思案ちまたの物案じ。詞アヽ氣合の惡い折からに。かてゝ加へて憎てらしい。權平づらの告げ口。地と言ひつゝ傍なる以前の文。見るにつけても疑ひの。長地カヽル心をぢつと納めても納めかねたる胸の内。フシしんき辛苦の亂れ髪。鬢の後れも氣障りと。有合ふ鏡臺引出しの。半太夫黄楊の小櫛も。いつしかにオクリ替り。果てたる身の憂きや。冷泉心のもつれ。解き櫛に。タヽキかゝる千筋の後れ髪。ナホスコハ心得すと又取上げ。解く程拔ける髮髢手に丸めて打眺め。詞ハテ合點の行かぬ。今日に限つて逆上の強さ。殊更髮の此樣に。拔けるは病ひの業なるかと。地言ひつゝ鏡の蓋取退け。向へば寫る怪しき顏。はつと惚り立退いて。フシ見れども邊りに人もなし。ハテ不思議なと立寄つて。また差向ふ鏡の影。よく〳〵眺めて。ヤア〳〵〳〵いつの間に此顏が。此樣に變つたぞと。地言ひつゝ我と我が顏を。ためつすがめつ目をとめて。見れば見る程惡女の相好。ハアはつとばかりに氣の如く立ちつ居つ。スエカヽル身悶え。どうど伏し。コハ何とせん悲しやと狂〳〵。詞エヽかてゝ加へて旦那はお留守。コリヤマアどうせう。地何と詮かたへに有合ふ土瓶の温み。口押分けて一口飲ませ。其儘耳に口差寄せ。詞奥樣。奥樣イなう。お岩樣と。地背撫でさすり樣々と心を碎く介抱に。フシお岩はその儘そこへ伏轉び。フシ悶え。苦しむ折からに。地かゝる事とはつゆ知らず。泣く子を賺して漸うと。フシ歸る小助が門の口。詞奥樣。さぞお待兼ね。何がモウ坊樣がやんちやばつかり。四つ谷中をあちこちと。賺し廻つて漸う只今。ソレちやつと添乳をなされませと。地言ひつゝ立寄りこれは扨て。御病中に大膽千萬。宵寢惑ひのお轉寢。エヽちとお嗜みなされませと。地傍に稚子そつと置き。見れば苦痛のその有樣。詞ヤア是はしたり。また例のお癪が發つたか。奥樣。地申しと呼び生けても正氣なければ抱起し。つく〳〵見れば怪しき相好。詞ヨヽヽヽ奥樣のこのお顏。マどうした事と地うろ〳〵きよろ〳〵。詞エヽかてゝ加へて旦那はお留守。コリヤマアどうせう。地何と詮かたへに有合ふ土瓶の温み。口押分けて一口飲ませ。其儘耳に口差寄せ。詞奥樣。奥樣イなう。お岩樣と。地背撫でさすり樣々と心を碎く介抱に。フシお岩は漸う息吹返し。詞ハアオヽ小助か戻りやつたか。さうして坊はどこに居やる。イヤモお氣遣ひなされまするな。どうやら斯うやら叩き付け。只今漸う寢かしましてごわりまする。オヽそれはマア〳〵嬉しうござる。アヽイヤ申し奥樣。それはさうとお前樣は。いつ

の間に其様な。怖しいお顔にはならつしやりましたぞいのと。地問はれて又も女氣の。涙は胸に漲りてッシ暫し。答もなかりしが。地やう〳〵に押鎭め。詞さればいの聞いてたも。いつもの通り伊右衛門殿。八幡宮へ參詣と出て行かしやつた其跡で。あんまり逆上が強い故。水庵殿の加減の粉藥。二口三口飲みし所へ。直助の權平が。裏から忍んで横戀慕。樣々口說く其中にも。伊右衛門殿は奥村の。娘に深う言交し。神參りとは僞りにて。小梅と契る其上に。わしに愛想を盡かさそうと。相好變る藥まで調へしとは聞いたれども。戀の叶はぬ意趣晴し。權平が拵へ事。よもや夫が其樣な非道な事はあるまいと。心で心取直せど。逆上は次第に强うなり。髮をすけば拔落ちる。狐へこの顏の。俄に變りし我が相好。ム、扨は權平が詞に違はず。奥村親子が工にて。水庵に言含め。毒藥を飲ませしよな。エ、思へば〳〵腹立ちや。大事の夫を寢取られし。恨みはこちからあるものを。却つて毒を飲ませしは。鬼とも蛇とも魔王とも。聞へがたなき奥村親子。おのれ其儘ヤ置くべきかと。地すつくと立つて表の方。駈出さん其勢ひ。小助はあわて抱き留め。詞コレ〳〵申し奥樣。氣相かへてコリヤ何所へ。ハテ知れた事。奥村の屋敷へ行き。憎しと思ふ小梅親子。恨みをいうて言破り。伊右衛門殿を引つ立てに。イ、ヤソリヤ惡い御了簡。權平が詞を信じ。奥村へござつても。先に覺えのない時は。こなたばかりか旦那の恥。サマヅ〳〵〳〵お心をとつくりとハテモお鎭めなされて下さりませ。イヤ〳〵。恥にならうが笑はれうが。モウかうなつた上からは。姫御前の嗜みも。色も花香も捨たつたわいなう。サア留めずと放しや。そこ退きやと。地角目立つたるコハリ瞋恚の炎。行くをやらじと留むる小助。晉に驚き目覺す稚子。母樣なうと泣出す。さすが血筋の恩愛に。詞オ、坊か〳〵〳〵いとほしや地可愛の者やと引寄せて抱きつくゞ母親の。顏を眺めて。詞イヤ〳〵この母樣はさうでない。こはい地怖いと稚子が。泣く〳〵膝を這ひおりて。詞べいよ。ほんの母樣呼んでくれ。地母樣なうと泣く聲を。聞く悲しさにいとゞ猶。詞アレ〳〵〳〵〳〵あれを聞いてたもいなう。まだ辨へなき子心にも。我が相好の變りし故。現在母を怖がつて。傍あたりへも寄付かねば。何と〳〵のめ〳〵此顏が。伊右衛門殿に逢はされうぞいの。エ、思へば〳〵わしが身は。

地どうした宿世の因果にて夫といひ我が子に迄。見捨てられしぞ悲しやと聲も惜しまず泣きければ。小助も道理とばかりにて フシ共に。涙にくれけるが。地お岩は猶も逆立つ顏色。詞とても此世に永らへて。生恥を曝さうより。死んで恨みを報はんと。地駈出す裾を引止め。さうはさせぬ。そこ退きやと。互に爭ふ帶の端。繻子のしやら解け因果のはし。挑み爭ふ フシ折こそあれ戻りかゝりし羽宮伊右衞門。何心なく我が家の内。這入るも知らぬ兩人が思はず ばつたり行當り。互に見合はす顏と顏。ホこれはお旦那お早いお歸り。地とその場の首尾の手持ちなく フシ小助はもち〳〵扣へ居る。地お岩は夫の胸ぐらに。しがみ付いてコレ伊右衞門殿。詞よるも〳〵わしを欺し。毎夜々々ぬつけりと。小梅と枕を交しやつたなうと。地いふも嫉妬の上がれ聲。角目立つたる形相に。驚きながらさあらぬ體。詞ム、合點の行かぬ此場の樣子。ガマそれは格別。その方が面體は。何故にその樣に。見苦しくは變ぜしぞ。何故。何故とは。エ、しら〳〵しいわいの。小梅親子が工にて。水庵に言附けて毒藥を此身に呑まし。コレ此樣に見とむなう。生れも付かぬ片輪にしたも。皆こなさんの心から。サア〳〵〳〵元の顏にして返しやと。地取付き歎くを取つて突退け。詞ヤア言はして置けば樣々の戲言。おのれ等こそ身が留守に。帶紐といて不義密通。主の目をぬくコナ不忠者。成敗の重ね斬り。覺悟ひろげと難題を。地聞くより小助は律儀一遍。涙と共に膝突きかけ。詞コレ旦那殿。イヤコレ伊右衞門殿。この小助を不義者とは。ソリヤこなた無理だ〳〵〳〵。胴慾でごはりますわいなう。下郎めは坊樣を。四つ谷一遍すかし廻り。戻つて見れば奥樣が。思ひも寄らぬ此有樣。樣子を聞けば右の段々。奥村へと駈出すを。やらじと留めた帶の端。それを不義ぢやの。イヤ密夫とは。ソリヤあんまりだ〳〵〳〵〳〵。餘りでごはりますわいの。ホンニ〳〵此年月。こなた樣を世に出さうと。おらが此。サ此態を見さつしやれ盆も正月もコレ一點。日がな一日。町小使に駈歩き。地犬に吠えられ夜廻りの。お役人にはエ、見咎められ。詞憂き艱難はいく何度。夜の目も〳〵碌に寐た事は。今の今迄ごはりませぬわいなう。地それに氣强い今のお詞。詞エ、聞えませぬ旦那殿。と地覺たゝいて恨み泣き。お岩も共にせき上げ〳〵。上は女御お后より。賤しき賤の下々でも。連添ふ夫を大切に。思

ふは女の道なれど。お前に貧苦を見せまいと。濯ぎ洗ひの賃仕事。心を碎く女房を。捨てゝ日影のます花に。移り。變るのみならず。覺えない身に疑ひは日頃の氣質に似合ひませぬ。むごいわい。なとばかりにて。恨みのたけを夕闇の雲に篠つく村時雨。フシ晴れ間は。さらに泣くばかり。地伊右衛門は耳にもかけず。詞ヤアその言譯暗い〳〵。主の留守に帶紐とき。狂ひ廻るが不義の證據。サア眞直ぐに白狀ひろげと。地手強き夫の一言に。お岩は猶も聲震はし。詞エ、その身の罪を隱さうと。覺えなき身に惡名つけ。わしを追出しその跡で。小梅と女夫になるのぢやなう。モウ此上は是非もなし。憎や恨みの奥村親子。おのれおめ〳〵添はさうかと。地以前の脇差追つ取つて。駈出す肩口引戾し。詞ヤアどこへ〳〵。此場をはづす間に合ひ詞。詮義濟むまでこの座は立たせぬ。イヤ〳〵〳〵行かいで置かうかと。地互に爭ふその中に。小助はうろ〳〵稚子も。共にうろ〳〵おろ〳〵。聲。詞母様どこへ行かつしやる。父様堪忍。地堪忍と裾にもつるゝ恩愛の。二人は修羅に引かれつ刀の柄。捻合ふはずみに鞘走り思はず肩先五六寸。アツトばかりに倒るゝ女房。南無三寶とお岩が刀もぎ取り捨つる切先が。因果の廻りか小助が胸。痛手にわつと七轉八倒。コハしなせしと伊右衛門が。立寄る足元稚子の急所にや當りけん。うんと一聲卽死の有様。さしもの夫も途方にくれ只忙。然たるばかりなり。地お岩はむつくと起返り。詞コリヤ〳〵〳〵こなた殺すのぢやなう。オ、殺さば殺せ一念は。憎しと思ふ小梅親子。取殺さいこ二人は修羅に コハリ目も見えず。引きつ二人は修羅に コハリ目も見えず。引きつ

ふは女の道なれど。お前に貧苦を見せまいと。濯ぎ洗ひの賃仕事。心を碎く女房を。捨てゝ日影のます花に。移り。變るのみならず。覺えない身に疑ひは日頃の氣質に似合ひませぬ。むごいわい。なとばかりにて。恨みのたけを夕闇の雲に篠つく村時雨。フシ晴れ間は。さらに泣くばかり。地伊右衛門は耳にもかけず。詞ヤアその言譯暗い〳〵。主の留守に帶紐とき。狂ひ廻るが不義の證據。サア眞直ぐに白狀ひろげと。地手強き夫の一言に。お岩は猶も聲震はし。詞エ、その身の罪を隱さうと。覺えなき身に惡名つけ。わしを追出しその跡で。小梅と女夫になるのぢやなう。モウ此上は是非もなし。憎や恨みの奥村親子。おのれおめ〳〵添はさうかと。地以前の脇差追つ取つて。駈出す肩口引戾し。詞ヤアどこへ〳〵。此場をはづ

でヤ置かうかと。地恨みの顏色髮逆立ち。睨み詰めたるその形相。さながら鬼女の如くにて物凄くも又。フシ恐しし。地夫は思案の胸を据ゑ。詞手にかけうとは思はねど。双の廻りは自業自得。不義密通の天の罰。地思ひ知れよと非道の詞。小助は苦しき息をつぎ。詞エ、こなたは〳〵こなたはなう。是程いうても聞入れず。無慈悲無道のこの成敗。カ、リたとへがたなき大惡無道。地如何なる天魔が魅入れしぞや。敷ならぬ下郎が命。さら〳〵惜しうは思はねど。覺えない身に不義の惡名と呼ばれて死ぬるがエ、くやしいわい。地それのみならずおいとしや。奥様迄が同じ惡名。まだ其上に和子様が。思ひがけない非業の御最期。詞他人の身でさへおいとしいに。現在の親の身で。こなたは〳〵何ともどざらぬか。コレ悲し

うはないかいの。エ、地むごい無情い心やと。我が身の手疵は苦にもせず。にじり寄つて稚子の。空しき骸を抱き上げ。スエカヽル喞ち歎けばお岩も這寄り。我が子の死骸抱きしめ。詞コレ〳〵伊之助々々々。父様の胴慾と。地母の心が愚痴なから。詞そなた迄が此最期。さぞ恨んで居やらうが。コレ堪忍してたも〳〵〳〵〳〵や。地親子は一世と聞くなれば。今別れてはいつの世に。又逢ふ事がなろかいなう。廣い世界に生ある者。物の哀れを知るといふ。現在家來や女房子が。今はの際に一遍の稱名さへ唱へもせず。餘所に見捨つる胴慾な。心は鬼かエ、蛇かいなう。むごいつれない我が夫と。恨みの數々數へ立て。口説き立つれば小助も共に。歎く涙は滿ち〳〵て四筋の雨や五月雨の降りしく死出の田長鳥フシ泣音。血を吐く如くなり。詞ヤア曲にも立たぬ世迷言。念佛。申して成佛せよ。地南無阿彌陀佛と兩人を。蹴り殺しに七轉八倒。虛空を摑み四苦八苦。此世からなる劍の山。無慚とフシいふも哀れなる。地かゝる所へ表口。息を切つて駈來る水庵。コレ〳〵〳〵伊右衞門殿。詞お岩殿の相好を變へた藥は我らが秘藥。皆奥村の母御の賴み。氣の毒ながらお內儀を。手にかけられしはもつけの幸ひ。是からは天井抜け。小梅殿と盃事。地誰憚らぬ三國一。聟になり濟ました。しやん〳〵〳〵。ハ、、、、。サア〳〵フシ早うとせき立つる。地夫も今更後悔の。詮方なみだ押包み。詞現在女房子家來まで。不便ながらも手にかけし立て。口説き立つれば小助も共に。歎く涙は滿ち〳〵て四筋の雨や五月雨の降りしく死出の田長鳥フシ泣音。血を通と書きしるして。根無川へ押流さん。迷言。念佛。申して成佛せよ。地南無阿彌陀佛と兩人を。蹴り殺しに七轉八倒。虛空を摑み四苦八苦。此世からなる劍の山。無慚とフシいふも哀れなる。地かゝる所へ表口。息を切つて駈來る水庵。コレ〳〵〳〵伊右衞門殿。詞お岩殿の相好を變へた藥は我らが秘藥。皆奥村の母御の賴み。氣の毒ながらお內儀を。手にかけられしはもつけの幸ひ。是からは天井抜け。小梅殿と盃事。地誰憚らぬ三國一。聟になり濟ました。しやん〳〵〳〵。ハ、、、、。サア〳〵フシ早うとせき立つる。地夫も今更後悔の。詮方なみだ押包み。詞現在女房子家來まで。不便ながらも手にかけし立て。口説き立つれば小助も共に。歎く涙は滿ち〳〵て四筋の雨や五月雨の降りしく死出の田長鳥フシ泣音。血を

爰は端近奥の間で。用意よくば裏道から。地早う〳〵に實に尤も。詞幸ひ隣の團助をと。地門口覗いて聲ひそめ。團助々々に出で來る團助。水庵差寄り耳に口。ナム〳〵ム、ヽ、ヽ、點頭き呼き兩人は。二人の死骸を引つかたげフシ奥の間さして入りにけり。地最前より始終の樣子。窺ひ聞いたる直助權平。物陰より現れ出で。詞ヤア科なき女房家來まで無成敗の羽宮伊右衞門。代官所へ注進と。地駈出す帶際引戻しヤアどこへ〳〵。詞大事を聞いたは汝が寂滅。地覺悟ひろげと斬付くる。こなたも我武者のだんびら物。二打ち三打ち戰ふ中。手練の羽宮に斬立てられフシ逃ぐるをばつさり後袈裟。地イデ此上は我が子の死骸。せめて人目を包まんと。幸ひ片方に有合はす石を重りの水

葬禮。詞南無阿彌陀佛と井筒の中。多の鼠。コハ心得ずとためらふ中。伊數は二つか三つともゑ廻る。報いは未打込む間も。アラ不思議や。コハリ俄かに家鳴り震動して。いづくよりかは數右衞門目がけ飛びかゝるを。シヤ面倒の世に。殘れる四つ谷怪談の因緣。かなと斬拂ふ。刀は稻妻燃え立つ陰火。くと。三遍〈知られけり